

No. 1172

新しい空の仲間

—DC—テン—

150
五冊

ところ狭ましと旅客機の並ぶ羽田国際空港。このほどより安全性と信頼性の高い新機種、DC-10がお目見えした。

この旅客機は内外の厳しい環境、保全条件に対応できる低騒音機として日本航空が採用したもの。

抜群の上昇性能を誇るDC-10はわずか十数分で高度8千メートル。

3つの部分に分かれている客席はいずれも国際的でモダンなイメージで色彩られている。主要空港の処理できる便数は限界に達し、騒音、過密と空港問題の深刻化している昨今、このDC-10はうってつけの旅客機といえそうだ。

受け継がれる真心

—愛知・名古屋—

331
大塚、A

私たちの生命を救う血液。

血液の需要は、輸血を必要とする医療の進歩や交通事故、労働災害の多発にともなって、毎年、増える一方である。

しかし、献血に全てをたくす血液の供給は、いっこうに安定への道をたどることがない。

愛知県、名古屋市に住む平野隆さんは、献血歴20年、ボーイスカウト・名古屋第71団の団長をしている。平野さんと子どもたちは、血液不足の夏をひかえ、街頭で献血を呼びかけることを決めた。今日は、その時に使う、幕づくりの日である。

団長の平野さんから、人間が助け合うことの尊さを、話し聞かされて来た子どもたちは、いつのまにか、献血の精神に、その心がやどるのを見つけ出している。平野さんの仕事は肉屋さん。

高校生の頃から始めた献血は、今も年に5回、欠かすことなく行っている。平野さんには、小学校4年生と、2年生になる2人の息子さんがいる。献血には、いつも家族揃って行く。

平野さんは、人の助け合いの心が、言葉だけでなく、実践がともなう大変なことであり、その尊さを身をもって子どもに教えたかったのかもしれない。売血制度がなくなって十年。献血者の数は、昨年350万人を超えた。

しかし、大半が血液の必要がせまってからの献血。平野さんのように、定期的に献血をする者は少ない。

7月1日からは、「全国、愛の血液、たすけ合い運動」の月間。平野さんが願う、人の助け合いの心がやがて、子どもたちに受け継がれた時、血液不足に心配することもなくなるであろう。